

「戻ること進む支援」 ～過去の学びは活かしている～

こどもデイサービスひまわり 山根 那美子

1. はじめに

こどもデイサービスひまわりは、社会福祉法人蓬莱会の中に属している「放課後等デイサービス」事業所である。もともとは日中一時支援から始まり、平成21年7月に「児童デイサービスたいよう」として本格的に児童のデイサービス事業所として開所。その後移転や事業拡大などを経て、平成26年8月には放課後等デイサービス「たいよう・ひまわり・たんぽぽ」として3事業所に分散となり、各事業所が年齢や障害、個々に応じた支援の提供を目指している。

ひまわりは主に中～高校生の児童の受け入れを中心としており、小学生を中心に受け入れている「たいよう」を卒業後に「ひまわり」へ上がってくる児童も多くいる。

ひまわりは当法人の生活介護事業所（ソイルセンター）と同建物内で行っているため、成人の方の作業の練習を経験したり、職員間同士でも「成人期に必要なこと、児童期にやっておくべきこと」などの意見交換をしたりしており、卒業しても安心して成人期を迎えることが出来ることを目指して日々支援を行っている。

今回対象となるK君との出会いは彼が小学校1年生の頃、「たいよう」へ通い始めた7年前になる。ここでは、そこから6年間の小学校生活を経て、昨年中学部に進学して様々な環境の変化を経験していく中での彼の葛藤と、その彼に寄り添い、日々試行錯誤を重ねた事業所での取り組みを綴る。

2. K君について

- ・K. N君（支援学校中学部2年生：男）、父・母・兄・妹(本人とは双子)の5人家族。
- ・知的障がいを伴う自閉症。
- ・小学部1年より当法人のデイサービスを利用開始し、小学部までは「たいよう」、昨年4月に中学部へ進学し、「ひまわり」の利用開始となる。（週2回）
- ・発語は無く、行動や手引きにて自分の想いを表出する。
- ・文字や時計を読むことは難しく、絵カードや写真の理解も低い。
- ・最初に学んだことが固定化しやすく、そこから変更を受け入れるまでに時間を要し、様々なことに対しての変化に弱い。
- ・状況や物の配置、生活の流れ等にこだわりがあり、「〇〇の時は△△を使う」「〇〇はここに置く」「〇〇の後は△△をする」など、自分の中でのルールを持っている。
- ・特定の職員に執着は無く、自分の要求は近くの職員に伝えようとする。
- ・感覚刺激の玩具やDVD、ドライブなどが好き。

3. 利用開始当初の様子

昨年の4月よりひまわりの利用開始となったが、変化が苦手なK君のため、3月の時点で事前に事業所見学を行った。しかし知らない場所ということもあってか建物内に入ることが出来ず、その後4月に利用を開始してからも建物には入れなかった。学校送迎の車内でそのまま過ごし、保護者に迎えに来てもらう日々が続いていた。

車内で過ごす間も室内にどんなものがあるか具体物を見せたり、本人の好きそうな玩具やおやつを見せたりしたが、入室の意思は見られなかった。より具体的に室内のイメージを持って安心して入室してもらうために玄関から室内までの動画を撮影して見せると、それにはとても反応されていた。

そういったことを重ねていたある日、本人の意思で入室をすることが出来た。その時点で利用開始から3週間が経過していた。

入室してからの行動の定着は比較的早く、それぞれの場所を教えることで「おやつ、トイレ、余暇」は取り組んでいた。ただし、警戒心が強い性格もあってか、室内のあちこちを動き回ることではなく、「荷物ロッカーの前」という自分が安心出来ると感じた場所で多くの時間を過ごされていた。

入室出来たということそのものに喜んでいただいていた私たちは、警戒心の高い本人の性格も含め、ゆっくり支援を進めていくつもりで、その当時その場所で余暇を過ごすことに対しては深く検討はしていなかった。

4. 新しい活動への取り組みと、そこから見えてきた課題

本人が事業所にも慣れ、過ごし方が安定してきたところで新しい活動を取り入れることにした。当法人の成人の事業所が主に行っている缶作業やペットボトルのラベル剥がしをひまわりでも仕事の練習として行っており、本人にも提供することとなった。

新しい活動に対して消極的なK君だったが、缶作業のやり方の見本を見せるとその通りに行うことが出来、ひまわりで取り組める活動がひとつ増えた。その後、缶作業が気に入ったK君は、作業場が目に入るとこちらが設定していないのに自ら作業場に行って缶作業を行うようになった。自発的に何かに取り組む姿は喜ばしくもあったが、その一方でこの行動が本人のルーティーンになってしまうのではないかと懸念と、見通しが無い無い中で突発的に目に入ったものに取り組む行動は、後々お互いに支障をきたすのではないかと私たちは考えるようになった。

新しい活動を取り入れたことで、代わりに私たちは様々なK君の特性を評価することが出来た。例えば缶作業が上手になってきた頃、新しい作業を教えようとBの作業を提供したが、簡単な内容であったにも関わらずK君は全く取り組まなかった。Cの作業もDの課題にもK君は取り組もうとしなかった。そこで私たちは、K君は「ここは缶作業をする場所」と思っているのではないかと、だから缶作業をすると決めている場所で他の物を提供しても取り組まないのではないかとこの特性に気付いた。案の定、K君は場所を変えてBの作業を提供すると取り組んだ。しかしこれでは活動ごとに違う場所が必要になるが、それはとても現実的には難しい。K君には「ここは缶作業をする場所ではなく、缶作業を含めた“様々な作業をする場所”である」という理解をして

もらうことが課題の1つとなった。

また別の日、文化祭に向けて作品作りの時期がやってきた。K君には簡単なシール貼りを提供し、半分取り組めたので次回の利用日に続きを提供した。しかしK君は行わなかった。提供の仕方場所も前回と同じにしているにも関わらず、K君は取り組まず、トイレに籠るようになった。トイレに籠り、しばらくして出てきては制作グッズがあるのを確認すると再びトイレへ戻ってしまうことを延々と繰り返していた。その頃からK君は、やりたくないことを求められるとトイレに籠ることが増えた。

私たちはまたしても理由を考えた。K君はDVDが好きだったので、それを出せばトイレから出てくることはある程度予測が出来たが、今後のことを考えると「やりたいこと」と「やるべきこと」を区別しながら過ごせるスキルが必要だと考えていた私たちは、もう少し彼の行動から想いを汲み取ってみることにした。

トイレに籠っては出てくるK君を観察したが、彼は出てきた時には必ず自分の過ごす場所に何が置いてあるかを確認している。それが自分の望むものでなければ再びトイレに籠り、しばらくするとまた出てきて確認していた。何度も何度もそれを繰り返すK君を見ていると、まるでトイレに入ることで「リセット」しているように見えた。「次に出てきた時には自分の期待するものが置いてあるのではないかと、そんな気持ちを込めてトイレから確認に出てきているようであった。

保護者にその話をしたところ、家庭でも似たようなことがあるのだという。K君は台所の引き出しを開けて大好きなカップラーメンを探していることが多く、望んだものが無いと何度もやってきては開ける行動を繰り返す。そのうちに母が買い足し、ある日開けた時には望んだものが入っている。その経験からK君は、「一度その場所を離れてリセットし、再び同じ行動をやり直せばいつか望むものが出てくる」ということを学んだのではないかとすることに私たちは気付いた。

彼はトイレに籠ることでリセットし、次に出てきた時には自分の好きなDVDが置いてあることを期待して、何度もその行動を繰り返していたのである。

そのことを踏まえ、K君の望むものをその都度用意すればトイレに籠ることは改善されるであろうという仮説は立てられたが、これから彼が生活をしていくうえで、好きなことしかやらないということは彼の成長には繋がらないとともに、必ず支障が出てくる。彼には「〇〇をすれば、△△が出来る（もらえる）」という見通しと交渉のスキルが必要であるという課題も見付かった。

5. 変化を受け入れる

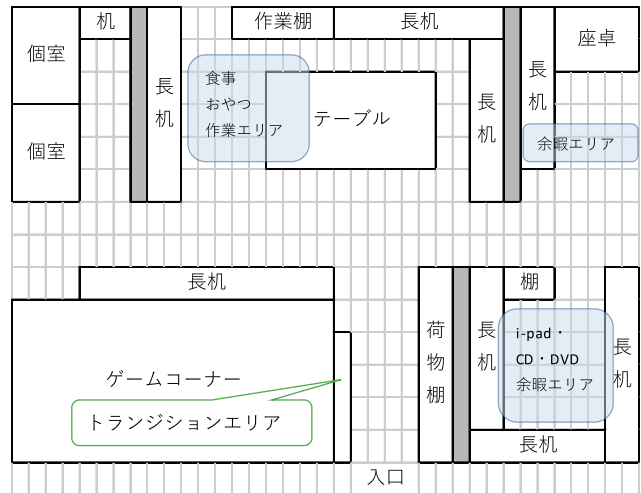
缶作業やおやつ、食事やドライブなど主なことは取り組めてきたK君だったが、相変わらず余暇を過ごす場所は荷物ロッカーの前のままで、缶作業以外に活動も広がらない。K君の余暇場所にマットを置いてその上で余暇を過ごし、そのマット自体を徐々に本来の余暇エリアに移動させていくということを試みてみたこともあるが、K君は変化に弱い。「昨日まで無かったものが今日はある」ということ自体に違和感を示し、マットそのものを置くことを嫌がった。やはり「最初の状態」を継続する傾向にあり、途中から何かを新しく取り入れることが受け入れられない様

だった。保護者もK君については「最初が肝心」だということを言われている。

「荷物ロッカーの前が本人の過ごす場所になっていること」「作業場では缶作業しか出来ないこと」を改善するために、私たちは室内の再構造化を行うことにした。元々物の配置や場所による使い方が曖昧な部分もあり、K君だけでなく他の子どもたちのためにも構造化はやるべきことのひとつであった。再構造化を機に環境をリセットし、K君の概念に沿った方法で新しく余暇を過ごす場所や、活動に取り組む場所を学び直せることを私たちは期待したのである。

<図1：構造化前>

食事やおやつを食べる場所の中に、作業場も兼ねていた。
時間帯は変えていたが、食べるエリアと作業のエリアを兼用していたため、時にはおやつを食べる人の横で作業する人もいた。
また、余暇エリアが複数あり、どこで何を遊んでいいのかわかりにくい。



<図2：構造化後>

食事(おやつ)エリアと作業エリアを完全に分離。余暇も内容に応じて場所を分けた。
作業エリア内で缶潰しやラベル剥がしの作業、あるいは課題を行なうなど複数の意味を持たせた。
各余暇エリアにはソファを設置し、リラックス出来るような環境を整えた。

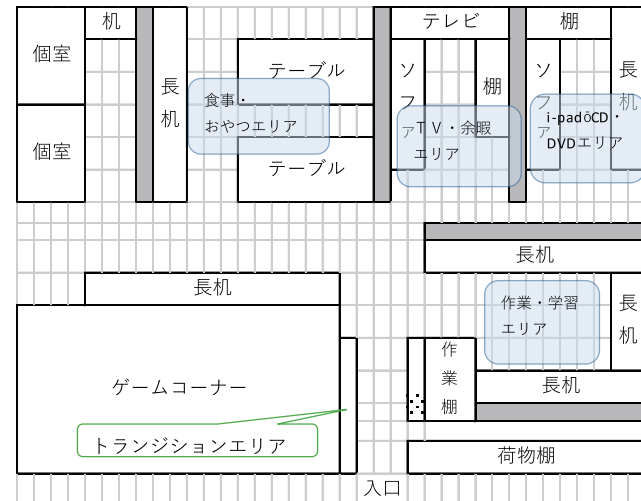


図1から図2のように室内の構造化を行った。余暇も内容別に場所を分け、作業場に関しては場所そのものを移動させた。また、食事を行う場所についても他の活動と兼用させずに、なるべく限りある空間の中で1対1対応の出来る様に構造化した。

「ゲームコーナー」部分に関しては1つの部屋として独立し、成人と児童の共用スペースになっている。そのため、実質ひまわりはL字の多少いびつな空間となっており、構造化といっても物やパーテーションの配置を変える程度に留められる。その中でも各エリアの用途、動線などをK君だけでなく、様々な子どもたちの特性にも配慮しながら再構造化を行なった。

構造化を行って最初の利用日、K君はすぐに室内の変化に気付いた。入室そのものには大きな抵抗もなく、検温やおやつなどは誘導にて取り組むことが出来たが、気に入っていた缶作業は場所が変わったためかエリアに入ることが出来なかった。また、本人の好んでいるDVDを本来観るべき余暇場所へ設置し、荷物ロッカーの前に本人が位置取りをしてしまう前にそちらの場所へ誘導を試みたがそれも拒否し、職員に「自分のいる場所にDVDを持って来て欲しい」というようなジェスチャーをされた。

K君は変化を受け入れるまでに時間を要するため、その後も利用の度に作業エリアへの誘導を試みたり、実際に職員がそこで作業する様子を見て見せたりしたが、それでもK君はエリア内に入ろうとしなかった。余暇の場所も荷物ロッカーの前から変更出来ず、そこに玩具を運んで遊んでいた。

K君はその当時DVDだけでなくボールも好きで、自分から探して取りに行くことが出来ていたため、その行動を活用して作業のエリア内にボールを置き、まずは「エリア内に自分の意思で一步入ること、エリア内の場所に安心してもらうこと」を行なった。その実践はすぐに効果を発揮し、「ボールを取りに行く」という目的で一瞬そのエリアに踏み入ることは出来るようになった。しかし、やはりK君にとって「缶作業をする場所」は構造化する前の場所で覚えてしまったためか、新しいエリアで作業をすることには至らなかった。

6. 原点に立ち戻る

再構造化を行い、新しく作業エリアを作ったことで逆に室内でのK君の行動範囲や取り組めることは狭くなってしまった。「余暇を適切な場所で過ごして欲しい、以前は行なえていた作業がまた新しい場所で出来るようになって欲しい…」目的に沿って支援をすればするほど、変化に弱いK君はどんどん私たちの理想とは異なる行動になり、私たち自身も目の前の課題が増えていくことに頭を悩ませた。

「どこでやり方を間違えたのか、K君にとってどの支援が合っていてどの支援は合っていないのか、このまましばらく継続してみた方が良いのか、継続すればいつかは変わるのか、それとも合っていない支援を継続することで間違った学びをしてしまうのか…」そんな想いがグルグルと巡ったが、一旦それを整理するために“K君の原点に立ち戻る”ことを思い付いた。

職員の中には、K君の小学校低学年の頃（利用開始当初）の支援に携わっている者が複数名いた。その職員の記憶では「K君は具体物のスケジュールを使っていた」という過去がある。その頃は今より知的にも低かったはずだが、キューカードと具体物を使ってK君は様々なことに取り組んでいた。

その後、職員達は異動もありそれ以降K君の支援には携わっておらず、昨年度ひまわりの利用を開始したことで久々に再会したのである。会わない間にK君の支援も進み、小学部から上がってきた時の引継ぎでは「スケジュールは写真カードに移行した」とのことであり、そのツールも引き継いだ。（写真1）

しかしひまわりではその写真カードはK君の行動や見通しを持たせる一助にはなっていなかった。

私たちは思い切ってK君の支援を小学校低学年の頃のやり方に戻すことにした。つまり「本人が

一番自立して行動出来ていた頃のやり方に戻す」ということである。

キューカードも当時と同じイラスト・形・大きさのものを使った。カードを使って所定の場所に戻ると、そこに今からやるべき活動の具体物が置いてある…という支援方法だ。

(写真2)

もう何年も前の方法だったが、慣れたカード、慣れた方法はきちんとK君の中に学びとして残っていた。この支援に変えてすぐにK君の行動に変化が見られた。

連絡帳提出や検温、おやつや食事やトイレはもちろんのこと、K君のトランジションエリアに作業の具体物を置いておくことで、エリア内で作業を行なうことも出来た。

ここでの支援のポイントは「最初に缶作業を提供しないこと」だった。缶作業自体は既にK君の中に身につけている。それを再びスタートとして行ってしまえば、K君はまた「缶作業の場所」とインプットしてしまう。そうならないように、作業エリア内では最初に簡単なマッチング課題を提供した。次の日はラベル剥がし、その次の日は缶作業…といったように、作業エリア内で複数の活動を経験し、“缶作業もその中のひとつである”ということを経験的に学べるようにした。

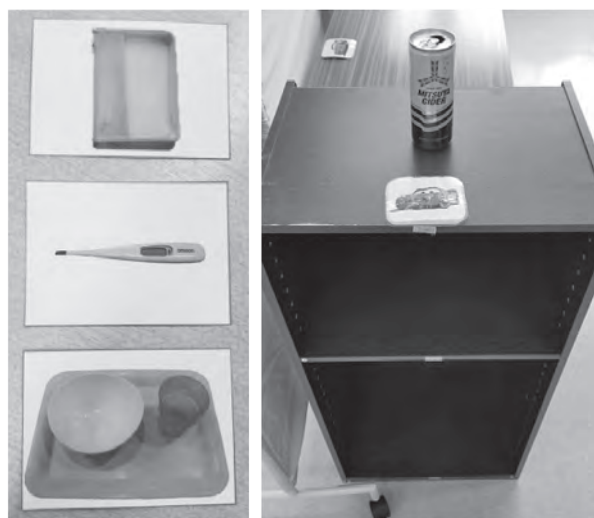
新しい活動への取り組みに警戒するK君ではあるが、徐々に経験を積んで今では箸入れの作業や下駄箱掃除、ホールのモップ掛けなども行えるようになってきている。

K君は「取り組んだ“場所”で学んだ」のではなく、「そこに置いてある“もの”（スケジュール）を見て活動を理解している」のである。今では強化子を楽しみにしているため活動の拒否も減り、余暇を選択出来るようにもなった。

見通しを持ち、安心・納得して自立して主体的に行動出来るための基本的なツールである「スケジュール」。この土台がしっかり身につけているK君の学び力を改めて実感した。そして幼少期から適切な学びをしておくことで、こうして場所が変わっても、何年経っても本人の力となって生きてくる。K君への支援を通じて、私たちは児童期の支援に携わることへのやりがいとその責任の大きさを再確認した。

7. 最後に

私たちは、とある課題に対してAという支援を試みる。それが上手くいかなかった場合Bを試し、上手くいけば次の段階へ進む。しかし上手くいかない支援が増えれば増えるほど「A-①」「A-②」「B-②」「C-③」と、あれこれと試しては方向がどんどん枝分かれ状態になり、結局「本来の目標に対しての支援」ではなく「上手くいかなかった支援に対しての支援」ということになりがちである。気付けば、上手くいかなかった支援によって生まれた新しい問題への対応に目が向いたり、上手くいかなかった支援をどうにか成功させようとあれこれ試したりしてい



(写真1)

(写真2)

るうちに、どんどん道に迷ってしまい、今自分（の支援）がどこに立っているのか、どこへ向かおうとしていたのかを無意識に見失っていることも多いのではないだろうか。

今回、「支援に迷った時には原点に立ち戻ること」がとても活きる事例だった。全ての人には「個別支援計画」という軸になるものがある。皆で話し合ったその計画を基に目標を見失わず、Bの支援がダメならAに戻ってCを試す、それがダメならAに戻ってDを試す…という風に、行き詰った時には分岐点に戻って道（支援方法）を選び直すということが、着実な達成への進み方ではないだろうか。

目の前にいる子どもたちと日々向き合っていると、個々にももちろん課題はある。しかし周囲の「こうなって欲しい」は、大概本人の「こうでありたい」とは合致していないことがほとんどだ。K君の例で言えば私たちは「余暇の場所で余暇を過ごして欲しい」と思っているが、K君は「荷物ロッカーの前で過ごしたい」のである。ここで大切なのは「どうすれば適切な場所で過ごせるか」ではなく、まず「なぜK君はここで過ごしたいのか」だということだ。本人のその思いの中に、支援のヒントが隠されている。本人の想いを理解し、それを汲み取り、本人の特性に沿った形で支援が提供出来た時に初めて“本人に寄り添った支援”というものが成り立つのだと思う。

とはいえ、コミュニケーションに課題を持った人たちの想いを理解するという事は簡単ではない。私たちもK君の気持ちを理解出来ているとは言えず、今もK君は余暇を荷物ロッカーの前で過ごしている。しかし今となっては、そもそもそれがダメなことなのかどうかすら疑問に思えてくる。

私たちは子どもたちの成長に繋がる支援をしたいと日々思っているが、成長とは「周囲の望む人間になれる」こととイコールではない。表面上問題行動が消失したように見えたり、本人が望んでいないのに無理矢理（本人の本当の想いを無視して）周囲の望む行動が取れたりしたところで、それは支援の成功とは言えない。「無意識に自分たちの理想を押し付けていないか、言うことを聞かせようとしていないか、今やっている支援は本当に本人のニーズに添えているか？」そういったことを自分自身に問いかけながら、丁寧に日々その日の支援を振り返り、本当の意味で寄り添い、共に成長していきたいと思う。支援には成功や失敗という二択では表せないことも多いが、本人の想いに寄り添えていたかどうかは、きっと本人自身が行動で教えてくれるはずだ。そんな小さなサインを見逃さずにいたいと思う。